

ソーシャルワークにおける「わかる」ことの意味

林 眞 帆

【要 旨】

近年、本人主体・本人参加のソーシャルワーク実践のあり方が活発に議論されている。言うまでもなく、ソーシャルワークとは、利用者本人による問題解決の過程を支える専門的な実践である。そして、その実践は、生きられる時間を歩む利用者の語りを聴くことから始まる。

本稿では、利用者の主観的意味への接近からソーシャルワークにおける「わかる」ことの意味について事例を通して検討した。

【キーワード】

主観的意味世界、人生の意味、語り、解釈

はじめに

元来、ソーシャルワークは、利用者の話を「聴く」ことを重視してきた。Richmondは、友愛訪問活動で利用者の話を聴き、生活実態を把握した。また、Biestekは、援助関係の形成によって利用者を深く理解することの重要性を指摘した。ソーシャルワークは利用者の側で「聴く」という行為によって、何をなすべきか考えてきたように思う。そして今日、科学的根拠に基づく実践を重視するソーシャルワークは、援助の焦点を利用者と生活環境の交互作用に向け、ケースマネジメントなどの手法により利用者の生活の豊かさを追求している。しかし、一方では、ポストモダンの潮流のなかで、「利用者は、福祉の真理のもとに権力装置の一部として主体形成を促進させられているという批判をもたらしている」(Pease2002: 135-36)。特に、「適応」や「エンパワー」に向かう実践を社会統制として、また、パターンリズムとして批判する(三島2002)。このような議論は、換言すればソーシャルワークが利用者の側に立ちきれるのか、と問われているように思える。実際に、ポストモダニズム以降、研究者や実践者の起点もクライアントの言葉や相互関係からとらえ直すことが要求されるようになった(木原2002)。

木原(1996: 141)は、利用者の側に立つ実践として「語り」を重視する。科学性と合理性の追求だけでは解決しがたい利用者の主観的意味世界は、人間存在の本質的な課題を内包することからソーシャルワークが最も担うべき領域であると述べている。

そこで、本稿は、ある障害者の語りをとおして、利用者の主観的意味への接近からソーシャル

ワークにおける「わかる」ことの意味について論考していきたい。

1. ひとを「わかる」とは何か

鷺田は、「もし『理解 (わかる)』ということが、他人と同じ気持ちになること、より具体的に他人と同じように感じたり、同じように考えたりすることだとしたら、そんなことはおそらく人間には不可能である」(2003:193)と述べている。さらに、「理解 (わかる)」とは、感情の一致や意見の一致ではなく、自他の間の差異を深く、そして微細に思い知らされることであるとし、教育やケアにおける「わかる」には、相手が物語ることをじっと待つことがとても大きな意味をもつという。鷺田は、この〈待つ〉こと、言葉が不意にしたり落ちるのを、ひたすら待つという行為のなかに「わかる」が潜んでいることを強調する。さらに、この〈待つ〉という行為には、他人を理解したい、理解しようとする関心と姿勢が重要だという。

McNamee は、「知る」ということの限界を踏まえたとえで、「私たちに最大限できることは、他者が言葉にした経験をこちらで解釈するように努め、そこに進んで身を置いてみることだろう」(=1997:139)と述べる。また、「わかる」過程には、「共感」をもって、自分の経験を語ったその言葉を訳していくことに他ならないという。言い換えれば、ひとは、他者の経験が物語として構成され、「語る」という行為を「聴く」ことによってしか、ひとを「わかる」ことができないのである。

久保 (2003:157) は、利用者の語りには、苦しみや困難さなど喪失体験が含まれており、「聴く」とは、その喪失体験の追体験であるとし、その語りへの傾聴は、単なる受動的な行為ではなく、能動的な過程を含むという。それは、利用者とワーカーの対話という相互行為のなかで自己を捉え直し、創造的な自己へと生成される営みとしての意味をもつ。つまり、ワーカーの「聴く」実践は、利用者の主観的意味世界を明らかにするだけではなく、利用者が主体的に変化していくことを支えるものである。かくして聴くということの先に、「わかる」ということが拓けてくるのである。

では、ソーシャルワークにおいて「わかる」とはどういうことなのだろうか。稲沢 (2002) は、援助関係を構成する被援助者と援助者の二者間の非対称性に基づく関係性は、苦しみを前にして「逃げられない者」(被援助者)と「逃げられる者」(援助者)という相違を認識し、にもかかわらず、逃げ出さないことを選択するとき形成されるとし、逃げ出さない行為が苦しみを背負う人に伝わり、非対称性ととも生きる関係に変化すると述べている。この対人関係における関係性の観点から、「わかる」とは、相手の体験を追体験するだけではなく、自らの世界で関わり、相互に作用し合い、利用者の主観的意味世界を共有することだといえる。端的に言えば、それは、これまでの人生のなかで何を軸に生き、人生を意味づけてきたのか、もしくは意味づけられないでいるのかを相互行為のなかで受け止めることであるといえる。

2. 障害者の主観的意味世界への探求

ここでは、中途障害者¹⁾の語りに焦点をあて、主観的意味世界への接近を試みる。本事例は、障害者自立支援施設の自立訓練サービスに通う A 氏 (男性50歳代) の語りである。A 氏は、3年前に脳出血を発症し、その後、自宅に戻り母と妹と三人で暮らしている。

1) A 氏の語り

U 県立高校を卒業後、F 県でスーパーの鮮魚店で2年間働く。その後、調理師資格を取得し、いくつかのホテルで勤務する。若いころから、漁師の父親に反発し、家を出たくて仕方がなかったと話す。「しかし、最初に務めた先が鮮魚店とは、やっぱり、父親の影響は強かったな。父親を超えられなかったな。」と語る。「自由気ままに好き勝手やってきた。家のことなど考えたこともなかった。そのせいで、離婚もしました。」と語る。

平成22年、自宅で突然の頭痛と吐き気に襲われ倒れる。急性期病院に救急搬送される。右皮質下出血と診断され、緊急手術を受ける。「倒れた当時のことはほとんど覚えていませんよ。」「意識が戻るまで三途の川を渡る夢をみました。4年前に亡くなったおやじがこっちに来てはダメだとしきりに叫ぶんですよ。意味がわからなかったけど、なんか言ったら悪いんやと思って…その時、俺の名前を呼ぶ声が出て意識が戻りました。」「最初は助かったと思ったけど、左手が動かないのですよ。」と当時のショックを語る。「あーやっぱり、あの生活の時はすごく大変やったですね。もうご飯を食べる時が一番辛かったですね。だって、わからんのですよね、食べても。で、周りの人が『あれ、Aさん残ってますよ』って言われるのが精神的にすごく苦痛やったですね。」「心が痛いですね。やっぱり、ああ自分が見えない、目が見えないっていうかね。恥ずかしいっていうかね。差別っていうかね。プライドっていうかね。やっぱりそれと歩きよって人にぶつかるとはですね。まだよく見えないから。」と、当時のイライラする気持ちを語る。次第に「イライラする気持ちよりも早く治そうと思うようになりました」と前向きに考えるようになっていったと言う。「前を向かなきゃと思ったのはね…弟。家族の気持ちですね。頑張るといふ家族の絆っていうか。みんなの気持ち。あとは仕事に対する復帰したいという、そういう思いもありますね。」「家族の気持ちですね、大切に思ってくれている。頑張るといふ家族の絆っていうか、みんなの気持ち。あったかいね。自分のことを真剣に思ってくれて、母はいのちがあるだけでいいと言ってくれました。あとは仕事に対する、前の職業の、復帰したいという、そういう思いもありますね」「仕事に就くこと、そのための努力がもう生きがいじゃないですか。それに私はみんなに比べて幸せだよ」と語る。「入所している人は、家族とかそういうのに飢えてるっていうか、僕はあの通所だから、そういうのよく見えるんですよ。そういうのがやっぱり、ここは入所施設ですからね。」「障害者っていうのは特にそういうのがある。差別的なことがやっぱ…」「だからこういう持ち物とか、すごく、こう、みんな凝ってるやないですか。ああいうのはその表れやと思いますよ、自己主張っちいうか…自分らしさみたいな、普段は出せないところがあるから。いろんな気持ちがあると思うから、自宅にいる僕はあまりみんなと関わらんよ。」「家族とかにそういうのに飢えているっていうか、僕はあまり話さないんです。喋るとね、なんかこう悪いような気がするんですよ。」「ぼくなんかまだまだですよ。この病気になるまでね、知らなかったこといっぱいあるんです。」

2) A 氏の語りが意味するもの

A 氏は、突然の発病で自分に起きたことが理解できず、意識が戻ると以前の自分ではない姿を認識した。それは、食事をしているとき、歩いているときなど日常の営みで他者からの指摘によってできない自分と遭遇している。それは、「はずかしい」「心が痛かった」の語りのように受け入れがたい出来事であったと思われる。また、他者からもたらされる障害認識は、自らを異質であると感じてしまう出来事となっていた。また、A 氏は自らに起きた出来事に対して、「早く治そう」「やっぱり仕事。前に進んでいかないと」と、目標を持つことで克服しようと試みている。また、同じ障害をもつ他者との関わりの中で、自分についての認識を変えていったように思う。自宅で暮らす自分と施設で暮らす他者との間で、家族の存在の大きさ、有難さを実感してい

る。「家族とかにそういうのに飢えているっていうか、僕はあまり話さないんです。喋るとね、なんかこう悪いような気がするんですよ」「ほくなんかまだまだですよ。この病気になるまでね、知らなかったこといっぱいあるんですよ」と、他者との関係の中で自己のあり様を見つめ直している様子がかがえる。さらに、障害を負う事になったが、自由気ままな生活では知り得なかった世界、人との出会いと学びから、障害に対する認識を変化させている。このように、A氏は、過去と現在を比べつつも、一貫した自分の人生として、障害に意味づけしながら、再ストーリー化を図っているといえる。

また、この経験の意味づけは、A氏と家族との良好な相互作用によるものと思われる。こん睡状態のときに自分の名前を呼び自宅に引き取ってくれた母や妹、弟に対して「家族の気持ちです、大切に思ってくれている。頑張るといふ家族の絆っていうか、みんなの気持ち。あったかいね。自分のことを真剣に思ってくれて、母はいのちがあるだけでいいと言ってくれました。あとは仕事に対する、前の職業の、復帰したいという、そういう思いもありますね」と、大切に思ってくれる家族の存在と共に暮らし続けることへの希求が、これからの自分のあり方を決めたと考えられる。A氏にとって突然の発病と障害は、混乱や苦悩をもたらしたが、「生かされた」と実感できる家族のつながりや人との出会いを通して生きる意味を見出したことが読み取れる。

3) A氏の主観的意味世界の構成要素

本事例は、発病後、専門的な相談支援を受けないまま、3年間を過ごしてきた事例である。詳細は不明であるが人生のターニングポイントとなる出来事（障害）をどのように意味づけたのか語りの解釈からA氏の主観的意味を整理したい。

本事例は、高次脳機能障害のA氏が「喪失と獲得」の二つの経験をとおして、新たな生きる場と設定に向け、生成変化していることを示すものととらえられる。それは「人は人生全体を通じて発達し続ける」（田垣2007：2）という発達観に立つことができる。

A氏は、発病当時から左手指の機能低下は認識できていたが、自由に病棟を移動することができるようになると、人とぶつかる、左側の食事を残すなどの不自由さを自覚することになった。「できるはず・できていないはず」の行為動作は、「できない・できていなかった」ことを他者によって突きつけられる。それは、障害をもった自己との対峙である。自分の過去と現在の相違は、簡単に受け入れられるものではなく、自己存在の否定をもたらしている。これはまた、障害者と健常者である他者との差異を認識させる。他者と線を引く・差別的・孤立などの言葉で表現されているように、社会からの疎外を経験し、葛藤を生じさせている。しかし、A氏は、自分を大切にしてくれる家族の温かさや同じ障害をもつ人の苦悩に目を向け始める。他者との交換による自己認識と他者認識のすり合せの中で、自己を捉え、自分を創り出す、間主観的過程を経て、発病から現在に至る経験に意味づけをおこなっているといえる。また、支持・相互援助・相互交換がおこなわれる家族や他者などの豊かな環境の存在が中途障害という経験の意味づけを促進させたと思われる。そして、障害を生きる自己の生きる意味を家族とともに「在る」という肯定的な意味づけにより強化され、現実世界に創造的適応を図ったことがうかがえる。

3. 主観的意味世界からのソーシャルワークへの示唆

ソーシャルワークは、社会や文化の価値を前提とし、個人の変化を重視してきた歴史がある。関心の中心は、パーソナリティの発達や自我機能の強化にあてられ、クライアントが環境に順応することが目標とされた時代である（適応概念の変遷は図1に示す）。しかし、生活モデルの登

場は、個人と社会への二重の視点を一元的に捉えなおし、一般システム理論における「適合状態」、生態学における「適応」の概念を用い、人と環境の関係が共に変化することで問題の解決を図ることを導いた（三島2012）。この背景には、人間は「適応」という最適な状態に向けて自分と環境を変化させていく主体であり、成長と発達の潜在的能力をもつという人間への深い信頼を基礎としている（Germai=2007）。しかし、ポストモダニズムは、ソーシャルワーカーの意図的な関与を権力として批判する。また、ソーシャルワークは、利用者を社会に適応させようとしているという批判を受けることがある（Michaelら=2010）。彼らの主張は、排除や差別を生む社会を変革することに力点が置かれるべきとし、ソーシャルワークが障害者個人や家族と折り合いをつけるという治療的な環境をつくる必要性だけに焦点化しているという批判である。このような背景について、稲沢（2012）は、ソーシャルワークが極めて高い倫理性を求められる仕事であるが、ソーシャルワーカーの権威主義的なプロフェッショナルリズムに陥った実践批判があると述べている。

本稿では、A氏の語りの再ストーリー化のプロセスから、利用者自身が変わるという事実が見えてきた。A氏の主体性をもった変化である。主体性とは、自由な意志のもと他者からの干渉を受けず、自己選択・自己決定・参加し、他者の干渉や保護を受けずに自分の行動を自分で選び、生活をコントロールする意志をもつことである（林2011：59）。A氏は、自らの意思で自分を支えてくれる環境と生きることを人生の意味と位置づけ、その手段として就労を自己の目標に設定した。重要なのは、A氏が他者から主体的であれ、変化しろと圧力をかけられたわけではなく、基本的な自己のあり方を変えずに自己を更新する過程（Dewey=1950：3）のなかで自らの生を見出した点にある。大切な人と過ごすことに価値を置き、アクシデントをストーリー化する本人の姿は、ソーシャルワークが果たすべき役割とは何かを示唆するものである。

問題ではなく可能性に目を向けるストレングスを提唱したSaebeey（2002）は、人は問題を解決していくだけの能力や資源をもつとしている。また、Perlman（1958）は、人間は一生のうちに何らかの問題に取り組む存在であり、人生を生き抜くなかでその問題を解決しているという人間観に立つ。このことは、自らのもつ能力や資源を最大限に活用し、障害を生き抜こうとする姿が描き出されたA氏の語りにもみることができる。そして、「語り」は、利用者がその時々に変化する社会生活のなかで何を思い、何を望み、何を発露してきたかを映し出し、解決の過程に関与するソーシャルワークの可能性を拡大し、その役割を最大限に発揮する重要なエレメントであるといえる。

表1 適応概念の変遷

精神分析論／自我心理学との関連における適応	一般システム理論、生態学との関連における適応	ポストモダン思考のソーシャルワーク
伝統的なソーシャルワーク (医学モデル)	エコロジカル・ソーシャルワーク (生活モデル)	社会構成主義 人間の間での相互作用を通して繰り返し現れる意味が個人の中の存在するのではなく、人々の間で構成されていく
①人間の意志や努力は個人の心理的な要因ではなく、社会規範などの客観的要因に沿ったものであり、それが社会的秩序をもたらす。 ②ソーシャルワーク実践が展開される社会や文化の価値を前提とし、それによって社会的認知を得る。	人（個人）と環境（社会）の二重の視点を一元的に捉える 一般システム理論における適応 ●開放システムのインプット、アウトプットが活発に行われ、システムを維持し発達させる ●フィードバック過程により自己調整して環境との適応を図る	適応を主体と客体（環境）との関係としてとらえる。 主体（アイデンティティ）は関係性によって達成される一貫性
個人の変化を重視 ●パーソナリティの発達 ●自我機能の強化（自我の対処能力を高める）	生態学視点の適応→人と環境の適合	適応→個々の主観的な語りの相互作用を通して創り出される新たな語り

<ul style="list-style-type: none"> ●防衛機能 ●役割遂行に必要な外的環境に近づきやすくすること <p>自我の自律性 (Ann Hartman 1991)</p> <ul style="list-style-type: none"> ①一定の枠の中に適合しようとする自己変化的に環境に順応する過程 ②積極的に環境を変えていこうとする環境変化的過程③自己統合の過程 Social Work-in-Situation, <i>Social Work: Journal Of the National Association of Social Work</i>, 36 (3), 195-196 	<ul style="list-style-type: none"> ・好ましい適合の状態を適応状態とみなす ・好ましい適合に向けて個人を動かす行動を適応 <ul style="list-style-type: none"> ①環境からの養成に合わせて、環境から提供される資源を利用するために、自らを変える ②環境が人のニーズに応答的であるように環境を変化されること ③適合状態をよくするために人：環境の関係を変化させること <p>生活モデルは、Hartmanの「適応」概念が用いられている。(ジャーメイン)</p>
--	---

注：本表は、狭間香代子 (2012)「ソーシャルワークにおける『主体性』と『適応』-人と環境との接点への多様な視座」『対論社会福祉学5』中央法規, 32-52の内容を整理したものである。

言うまでもなく、ソーシャルワークは、本人が社会とのつながりのなかで自らの人生を歩む、その過程を支えることである。「語り」には、生きることの苦悩とそれでもなお、歩もうとする主体的姿が含まれ、聴くことの実践においてのみ「わかる」ことができる。反面、利用者が語ることの意味は深く、援助者には聴いたものの責任が課せられる。つまり、ソーシャルワークにおいて「わかる」とは、利用者が身におこった出来事を言葉にして語ることをとおして、その経験が意味づけられ、援助者が利用者の生きられた時間の現実を自らの身に寄せていくことでの了解である。そして、援助者の役割は、その了解をわが身と社会のあらゆる資源を活用して、利用者の生きられる時間を支えつくすことであるといえよう。同時に、語りのなかにある利用者のリアリティは、一人ひとりがつ生活世界のありようと生きる力を示し、援助者に関与のしかた（機能）を示すものである。ここに「クライアントのいるところから始める」というソーシャルワークの基本原則 (Johnson = 2004) をみることができる。

おわりに

本稿は、A氏の「語り」をとおして障害を生きぬく覚悟を見いだす過程から、A氏が着地したことわりを解釈することを試みた。そのことから、ソーシャルワークにおける「わかる」ことの意味を探究した。その結果、利用者の主観的意味世界への接近は、ソーシャルワークという専門的実践が最も関心を寄せるべきものであることを見いだすことができた。野口 (2006) は、「研究」とは、ナラティブからセオリーを取り出すこと、あるいはナラティブをセオリーに変換することだといひ、それが日々の実践に還元されるのだという。その意味からも、ソーシャルワークが語る、聴く、わかるという利用者と援助者の営みから出発することの意義は大きい。

付記

本研究における調査研究は、日本社会福祉学会の研究倫理指針に基づき、倫理的配慮を行っている。また、記録データや事例内容についても分析に影響がでない範囲において特定できないように加工している。

【注】

- 1) 本稿では、「高次脳機能障害者」および「障害」と表記する。その背景には、「障がい者制度改革推進会議」においても結論が得られていないこと、本稿では障害に伴う生活課題に着目するものであり、障害を個人の属性として捉えていないことなどによる。

【文献】

- Carel B. Germain (1992) *Ecological Social Work—Anthology of Carel B. Germain* (=2002, 小島蓉子編訳・著『エコロジカルソーシャルワーク—カレルジャーメイン名論文集』学苑社。)
- Rapp, C.A., Goscha, R.J.(2006) *The Strengths Model Case Management with People with Psychiatric Disabilities 2th ed.* (=2008, 田中秀樹『ストレングスモデル—精神障害者のためのケースマネジメント』)
- 稲沢公一 (2012) 「ソーシャルワーク初段階の価値をめぐる葛藤—リッチモンドの足跡をたどって」『対論 社会福祉学 4 ソーシャルワークの思想』中央法規出版社, 56–75.
- 狭間香代子 (2012) 「ソーシャルワークにおける『主体性』と『適応』—人と環境との接点への多様な視座」『対論 社会福祉学 5 ソーシャルワークの理論』中央法規, 32–52.
- 久保美紀 (2003) 「ソーシャルワークにおける『聴く』ということ—意味生成の過程として」『明治学院論叢 (690), 155–175.
- 久保美紀 (2002) 「ソーシャルワークにおけるエンパワーメントのもつ人間観—クライアントの主体性をめぐって」『人間福祉の思想と人間観』ミネルヴァ書房, 134–148.
- Oliver, M., Sapey, B.(2006) *Social Work with Disabled People 3rd ed.*, Macmillan. (=2010, 野中猛監訳、河口尚子訳『障害学にもとづくソーシャルワーク—障害の社会モデル』金剛出版。)
- 三島亜紀子 (2002) 「社会福祉学における『主体』に関する一考察」『ソーシャルワーク研究』 28 (1), 39–44.
- Pease, B (2002) *Rethinking Empowerment : A Postmodern Reappraisal for Emancipatory Practice*, British Journal of Social Work, 32, 135–147.
- Saleebey, D.(2002) *The Strengths Perspective in Social Work Practice 5rd ed.*, Allyn & Bacon, 1–23.
- McNamee, S., Green, K.J. Eds.(1992) *Therapy as Social Construction*, Sage Publication. (=1997, 野口裕二・野村直樹訳『ナラティブ・セラピー—社会構成主義の実践』金剛出版。)
- 田垣正晋 (2007) 『中途肢体障害者における「障害の意味」の生涯発達の变化』ナカニシ出版。
- Perlmam, H (1957) *Social Casework: A Problem-Solving process* (=1958, 松本武子訳『ソーシャルケースワーク：問題解決の過程』全国社会福祉協議会。)
- 木原活信 (1996) 「ソーシャルワークにおける『意味』の探求と解釈—ある難病患者の病いの『語り』をめぐる」『広島女子大学生生活科学部紀要』 2, 141–155.
- 木原活信 (2002) 「社会構成主義によるソーシャルワーク研究方法—ナラティブ・モデルによるクライアントの現実の解釈」『ソーシャルワーク研究』 27 (4), 28–34.
- Johnson, L. C., Yanca, S.J.(2001) *Social Work Practice : A Generalist Approach*, 7nd Ed., Allyn & Bacon. (=2004, 山辺朗子・岩間伸之訳『ジェネラリスト・ソーシャルワーク』ミネルヴァ書房。)
- 三島亜紀子 (2012) 「ソーシャルワークにおける『主体性』と『適応』—人と環境との接点への

- 多様な視座」『対論 社会福祉学5 ソーシャルワークの理論』中央法規, 32-5.
- Peace, B (2002) Rethinking Empowerment : A Postmodern Reappraisal for Emancipatory Practice, *British Journal of Social Work*, 32, pp. 135-147.
- 鷺田清一 (2003) 『臨床とことば』 阪急コミュニケーションズ.
- Dewey, J (1916) 『Democracy and Education : an introduction to the Philosophy of education』 (=1950, 帆足理一訳『民主主義と教育』春秋社.)
- 林真帆 (2011) 「ソーシャルワークにおける『主体性』に因する一考察—主体性概念に着目して」『別府大学紀要』 52, 55-65.